

日本農学アカデミー第7回シンポジウムレポート

「人と動物との共生」

—農学の新たな研究領域に注目—

日本農学アカデミーは、農林水産業をめぐる課題、人間と自然との関係、食の安全問題等について、一般の方々と研究者との相互交流を促進するため、年1回、シンポジウムを開催している。第7回のシンポジウム(6月4日(土) 学術会議講堂)では、「人と動物との共生 ～伴侶動物・家畜・野生動物～」がテーマに取り上げられた。

実践総合農学会では、学会誌『食農と環境』第2号(本誌)で「バイオセラピー研究の最前線」を特集しており、本シンポジウムテーマと密接な関連があるため、そのレポートを行った。

今回のシンポジウムのねらいは、「成熟化した現代社会における人と動物との新しい関係を探り、農学がそれらの関係の発展にどのように貢献できるかを考える」であり、3つのセッションを開催して課題に接近した。シンポジウムには、農学関連の学術会議メンバーだけでなく、若い学生が多数参加しており、本テーマが若者の強い興味を引いていることが感じられた。セッション1では、「人間と動物の新しい関係 Therapeutic Riding」について、本誌の特集に登場している川嶋 舟氏

(東京大学大学院農学生命科学研究科研究員)の報告と、滝坂信一氏(国立特殊教育総合研究所総括主任研究官)のコメントが行われた。本報告では、最近注目されているセラピューティック・ライディングの可能性と課題が明らかにされ、熱心な討議が進士五十八氏(東京農業大学長)の司会のもとに行われた。

セッション2では、「教育ファームにおける家畜とヒトのふれあい —フランスにおける教育ファームの取り組みを中心として」について、永松美希氏(日本獣医畜産大学助教授)の報告と、小林信一氏(日本大学生物資源科学部教授)のコメントをもとに、矢野秀雄氏(京都大学大学院農学研究科教授)の司会で論議が行われた。ここでは、フランスと日本の教育ファームの実態と効果・課題などについて論議された。

セッション3では「2004年クマ騒動が示すこと—森林管理と野生動物保護の課題」について、三浦慎吾氏(新潟大学農学部附属フィールド科学教育研究センター教授)から報告が、梶 光一氏(北海道環境科学研究センター主任研究員)のコメントをもとに、太田猛彦氏(東京農業大学教授)の司会で有意義な論議が行われた。

以上、3つのセッションでは人間と動物、人間と農業、人間と野生動物との関係のあり方と、その共生の方法について熱心な討議が行われ、改めて農学の研究領域が大きく拡大するとともに、医学、心理学、教育学、動物生態学などの学際研究の展開が重要であることを強く認識させられた。

(レポーター：藤枝 隆)



新しい農学について熱心な討議が展開された